

評 価 研 究 部 会

I 研究テーマ

「生きる力を培う評価」

II 研究テーマ設定の理由

知識の習得だけの学習ではなく生きていくために必要な力をつけていくために、一人ひとりが持っている自分のよさや可能性を十分発揮させ、心豊かに主体的創造的に生きる力を身につけていくようにするためにどうしたらよいだろうか、ということ念頭に置き研究を進めてきた。生きる力を培うには、①自分自身が「大切な存在である」「役に立つ」という気持ち子どもたちにもたせること、②「どうしていったらよいかを考える」「協力し合う」「見通しを持つ」力を身につけさせること、が大切であると考えた。このような子ども達を育てていくためには評価活動をどうしていったらよいか研究を進めるために、今年度もこのテーマを設定した。

III 研究の経過と内容

1. 研究の経過

| | | | |
|-------|---------------|-----------|-----------|
| 4月10日 | 研究テーマ・メンバーの確認 | 9月4日 | 実践報告と討議 |
| 5月15日 | 研究の計画の決定 | 10月2日 | 実践報告と討議 |
| 6月17日 | 実践報告と討議 | 10月25・26日 | 教育研究山梨県集会 |
| 8月7日 | 実践報告と討議 | 11月4日 | 県集会環流報告 |
| 8月25日 | 実践報告と討議 | 1月27日 | 研究のまとめ |

2. 研究の内容

(1) 子どもが主体となる学びの追求

日々の教育活動において、ともすると受動的になりがちな子どもの学びを「主体的な学び」にしていくための研究をする。(目的意識を持たせるなど)

(2) 振り返り活動を取り入れた実践

子ども自身が自分の活動を振り返り、自分自身の学びぶり(何がわかったか、何がまだ足りないのかなど)を考え、メタ認知を高めていく。そこから先へ見通しを持って学習に取り組み、次へとつなげていく。この学習サイクルを大切にしていくことで、主体的に学ぶ子ども達を育てていく。

子どもにも教師にも学習を振り返りやすく、見やすく、また短時間で効果的に行えるように、学びの全課程を一枚の用紙の中で振り返ることができる1枚ポートフォリオの形式も取り入れる。

(3) 誰もが普段の授業の中で取り組むことができる授業

特別なものではなく、普段から授業でつかえるという視点で実践を報告し合い、前年度の実践を取り入れた検証を重ねることもめざす。

(4) 学び合い活動を入れた授業

子ども同士で教え合うなどの活動を取り入れ、互いに学び合い、わからないことを互いに聞き合う活動を授業の中に仕組んでみる。

3. 実践例 3年 理科

(1) はじめに

3年生は、生活科から理科、社会科へと移行する学年であり、児童は初めての理科、社会科の学習に期待を膨らましている。特に理科の観察においては、生活科とは違いより詳細に客観的事実に基づいた観察が求められてくる。しかし、3年生になったばかりの児童は、ともすると思ひ込みで植物や昆虫の絵を描いてしまう。そこで、今年度は、理科の観察において児童が植物や昆虫を継続的に身近で世話をし、視点を与えて観察をすることで、科学的な視点が養われるであろうと期待して本実践を行ってみた。また、理科どの単元においても学習のまとめとして、一枚の紙に学習したことや単元を通して学んだことを記述していくことで学習内容がより定着し、自主的に課題に取り組む姿勢が身についていくだろうと期待して実践を継続している。

(2) とりくみ内容

- ・ モンシロチョウ・アゲハチョウの観察
- ・ ホウセンカ・ひまわりの観察
- ・ 成長の様子を観察カードに書く。
観察の視点を与える。例：色、形、足の数、葉の形、枚数、高さ、茎の太さなど
- ・ 教科書を見て、観察したことを確認する。
- ・ 学習のまとめとして、一枚の紙にモンシロチョウやアゲハチョウのたまごから成虫になるまでの成長の過程、ホウセンカやひまわりの生長の過程を描かせる。

(3) 成果と課題

学習のまとめとして、このような活動を継続していくことで、児童一人ひとりが課題をしっかりとらえて実態に応じて表現することができるようになってきた。絵を描くことが苦手な児童も繰り返し取り組むことで少しずつ描けるようになった。まとめ方については、決まった形があるわけではなく児童の自由にさせているが、一人ひとりの作品を紹介することによって、友達の良いところを取り入れてまねしたり、自主的に教科書を開いて確認してより詳細にまとめたりできるようになってきた。「もっとやりたい」「まとめの時間をもっとください」と楽しみながらまとめの学習に取り組んでいる児童が多かった。また、学習のふり返りすることにより、学習内容をより定着させることができた。

今後は、学習活動がマンネリ化しないよう、まとめ方について課題を与えるなどして工夫していきたい。

IV 研究の反省と課題

今年度も子ども自身が活動を見通し、振り返り、自分自身の成長が実感できる学習活動の実践を重ねてきた。特に今年度は、新しく理科の活動の内容が加わったり、理解した内容を言葉でなく立体で表現したりと実践にも幅が出てきた。継続して取り組んでいく大切さもあるが、新しいことを試して、広げていくことにも力を入れていきたい。

どの教科にも共通して言えることは、自分の考えをしっかりとって学習していることである。また、絵や文や立体で表現し、見える形で残し、子どもたちが学習を振り返ることができるような工夫もある。単元のはじめとおわりで比較し、その成長が感じられる実践も多かった。

しかし、教師がこのようとりくみを行うためには、子ども以上にねらいと見通しをしっかりとって授業を行うことも重要である。授業展開の工夫、臨機応変に対応できる技量なども必要となってくる。

また教科だけでなく特別活動でも子どもの力を伸ばしていくことはできる。その際にもただ振り返らせて反省する作業を行うのではなく、自分のできたところ、上手いかなかったところを具体的に想起できるように言葉を添えたり、友達の良いところを紹介したりするなどの手立てをすることが大切である。そうすることで子どもたちがどうしたらよいかを少しずつ考え、次に何をするかを決めて、自主的に学習できるようになっていく。

「生きる力を培う」ためには、自分が「どう考えるか」「どうしたいか」などの考えをもち、さらに人の意見を聞いた上で取捨選択して良いものにしていくことが大切だと考える。そして、やはりそれを相手に分かってもらえるように表現していくことが大切である。

しかし、子どもたちの中には、自分の考えや気持ちを表現していくことに苦手意識や抵抗感をもっている子も少なくない。それらを小さくしていくためには、子ども自身が「認められている」と感じる事が重要である。子どもたちの中には、友達の欠点を注意することに力を入れてしまう子もいるが、良いところを認め合うことで欠点が補われていく。教師が褒めて認めることも大切だが、友達から「〇〇がすごいです」「これ上手だね」「□□さんの意見に賛成です」など何気ない一言が嬉しかったり、自信につながったりする。他人から認められることで自分への肯定感につながり、よりよく生きていくことにつながると考える。人間は、「人の役に立っている」と感じる事が生き甲斐になるとよく言われる。自分や他人への信頼感を育てていくためにも、自分を振り返る、友だちの良いところを見つけ伝え合う、という取り組みを今後も続けていきたい。